2023 年 1 月 10 日

交換留学報告書

―延世大学―

静岡県立大学

国際関係学部国際言語文化学科 3 年生

コロナの終息が未だ見えない中、韓国の延世大学で 2022 年 2 月から、およそ 10 ヶ月の間留学出来たことが、新たな出会い・発見、また葛藤・悩みなどを通じて、自分自身が大きく成長する非常に良い機会となった。

今回の留学生活を、＜語学堂の授業＞、＜学生生活＞、＜印象に残っている旅行＞の 3 つの観点から報告する。

まず、語学堂の授業についてである。私はもともと韓国語が難なく読めるわけでも、流暢に話せるわけでもなかったため、1 学期と夏休みの間は、延世大学にある語学堂に通っていた。語学堂とは、名の通り韓国語を集中的に学習する語学学校である。平日毎日 9：00～13：00 までみっちり韓国語を学習する。毎日宿題などが課されながら、クラスメイトと切磋琢磨して韓国語を学べるのは、1 人では怠けてしまう私にとって最適な環境であった。韓国語のレベルがほとんど似通った生徒が集まってい

るので、（間違ったり下手な韓国語を使ってしまったらどうしよう）とか（分からなかったら恥ずかしい）と、躊躇することなく、積極的に発表・質問することが出来る。

　さらに、放課後には「カカオトーク」というチャットアプリを通じて、先生から宿題の添削や個別の質疑応答にも対応してもらえた。授業内でも、毎日新たな単語・文法・長文を見るので、実際に TOPIK（韓国語能力試験）を受験した際も、留学前に比べて、かなり抵抗なくすらすら韓国語を読めたり聞けたりするようになったと感じる。

　また、語学堂で出会った友人とは、頻繁にご飯を食べに行ったり、カフェでお茶をする仲になった。年齢も、国籍も、宗教も全く異なる、ただ韓国語を勉強するために韓国に来たという共通点しか持たない自分たちが、誰の母国語でもない韓国語を通じてお互いの文化について知ったり、近況を話し合ったりするのはとても楽しかった。

　次に、学生生活について述べる。延世大学での学生生活・学校生活は、自分から積極的に動けば動くほどかなり多くの体験が得られる。その中でも良かった経験を２つ

挙げるとするならば、チューター制度とサークル活動である。

　チューター制度とは、現地の学生に 1：1 で韓国語を教えてもらえたり、その学生と市内やソウルで一緒に遊んだりできる制度である。もちろん申し込みは必要になるが、ためらうべきではない。チューター側となる韓国の学生は、拙い韓国語でも理解しようとしてくれるし、日本のことについて興味を持って聞いてくれる人が多かった。私は 1 学期と 2 学期で異なるチューターに出会ったが、韓国語のスピーキングテストの練習に付き合ってくれたり、ウォンジュが地元の友人は、可愛いカフェやおいしいレストランに連れて行ってくれた。チューター制度で出会った友人を通じて、さらに新たな韓国人学生との出会いを紹介してもらえることも多く、韓国人とのつながりを増やしたいと思うなら、やって損することは全くないプログラムであると考える。

　部活について、私は 2 学期から「OMG」というヒップホップサークルに所属した。ダンスのみならず、ラップ部門・R&B 部門、さらには経営部門まで、部員全 100 名を

擁する大きなサークルである。もともとダンスが好きで、韓国人の友達を１人でも多く増やしたいという気持ちから入部した。そこでは、授業や留学生向けの韓国語とも違う、略語などの若者世代の生の韓国語を聞くことが出来、非常に興味深かった。さらに、そこで出会った友人も、私が韓国語についていけないと分かると、ゆっくり丁寧に、英語やジェスチャーなども混ぜながら説明してくれた。韓国語が出来なくても、韓国人の友達を作り、その人と話しながら徐々に出来るようになっていけばいいので、まずは何でもチャレンジすることが大事であると、改めて気づいた。

　最後に紹介したいのは、印象に残っている旅行地である。私が韓国に来た当初は、まだまだコロナの感染者数も多かったが、それでもだんだんと制限などが解除され、自由に動ける部分も大きかった。留学期間中、かなり旅行をしたが、その中でも良かったのは、チェジュである。チェジュは、韓国本土とは少し離れた島であり、行くのには飛行機に乗る必要がある。食事も風景もウォンジュやソウルとも全く異なる、少し異国のような雰囲気で、とても楽しかった。アワビのお粥やその土地ならではの酔

い冷ましスープなどのご当地料理や、韓国一の規模を誇る水族館や茶畑など、一瞬も目を離せないものばかりであった。

　今まで、韓国に１度も行ったことがなかった私にとって、この留学生活は毎日が刺激的でまるで冒険をしているかのようだった。時に大変な状況に陥ったり、パニックになることも少なくなかったが、それでも、そのときになんとか自分でしようとする力が鍛えられたと思う。交換留学生として渡韓する前から手厚くサポートしてくださった国際交流センターの方々や先生方、そして辛いときに励ましてくれた家族や友人に最大限の感謝を述べるとともに、この恩を返せるようにしたい。

2022年7月24日

交換留学報告書

-延世大学-

静岡県立大学

国際関係学部国際言語文化学科4年生

延世大学で過ごした１年間、人間としても、社会に出る前の人材としても、大きく成長できた。新型コロナウイルスの影響で、思うようにならない事も多くあったが、それらも含めて自身の糧になったと感じている。留学中のことについて、授業、課外活動、コロナウイルスの影響の三つに分けて報告する。

まずは授業に関してである。授業は主に一コマ１単位、3時間で構成されている。授業の難易度や課題の量は科目ごとに違うため、学年の区分がされている。これは日本と同じだが、課題の量や授業の進め方は日本よりも多様だった。同じ科目や授業群でも教授によって難易度や課題の量が違うため、履修登録の前に授業の口コミをよく調べることが重要である。韓国では就職時に大学の成績を重要視するため、成績をよくするためにも一生懸命な学生が

多い。いい成績を取るためには、自分の努力だけではなく、授業選びも大切である。そのため、学生同士が授業の口コミやサークルの口コミ、教授に関すること等々を共有できるプラットフォームが発達している。授業の口コミ等を共有できる『エブリタイム』というアプリケーションでは授業関連のことだけではなく、学生同士が交流して会ったり、寮のルームメイトを探したりするためにも使われている。日本よりもデジタル化が進んでいることによる恩恵を受けていると感じた。

　かくいう私もこのアプリケーションを通してある出会いを得た。昨年の半年間で韓国人の友人作りに難航したため、その相談をこのアプリに上げたのだ。すると、ある学生から「日本語の授業をされているノ・ヘギョン先生にコンタクトを取ったらどうか」という提案があった。その提案通り先生に連絡をしたところ、日本語の授業の助教授としての仕事をさせて頂けることになった。そこで出会った卒業生の方に翻訳の仕事を紹介していただいたり、授業関連の書類を作成・提出したりしたことは、非常に貴重な経験であった。

（ノ・ヘギョン先生）

昨年後期は主に英語で受ける授業を取り、本年前期は韓国語を中心に授業を受けた。英語の授業も韓国語の授業もほとんどがネイティブなため、特別な言語的配慮はなかった。しかし、ある教授はご自身が日本語が出来るからと日本人留学生のみ日本語での試験解答を可能にして下さった。ある日本人の友人は手話の授業の教授とカフェに行っていたこともあった。教授と学生の距離が近いのも新鮮であった。韓国の大学に在籍中、日本人であるために

肩身の狭い経験をしたことは一度もなかった。韓国に留学すると、帰国後に知人から「嫌な思いをしたことはなかったか」と聞かれることもあるが、そのようなことは一度もなかったと断言できる。

次は課外活動に関して報告する。コロナウイルスの影響もあり、サークルには所属しなかったため、関わりの多い人は必然的に寮で出会う人が主であった。私は一年間の間、中国人2名、韓国人2名、日本人1名のルームメイトに出会った。全員いい人であったが、生活習慣の違いや衛生観念の違いなどで難しいことも多くあった。特に韓国人二名との生活は、とても楽しかった半面大変な事が多かったように思う。一人目の韓国人ルームメイトは、昼夜逆転生活をすることが多かったため、規則正しい生活を好む私とは合わなかった。ただし、寮内にいることが多かったため、良く会話をしたルームメイトだった。よく私の言葉を聞き取ってくれて、優しく話しかけてくれたため、会話をするのが楽しかった。韓国語の実力も大幅に伸びたように感じる。二人目の韓国人ルームメイトは、一人目とは真逆のせっかちで明るい性格で、話す言葉も早かった。しかし毎日会話していれば慣れ、彼女の言葉を通してより韓国語の実力は伸びた。ルームメイトが変わるとともに、私の韓国語の話し方や口癖が変わっていったことも非常に興味深かった。

そもそも、家族から離れて住むことが初めての経験であったため、初めての寮生活はストレスもたくさん受けた。しかし完全一人暮らしではなく、寮で暮らせた事は私にとって非常にいい経験だった。寮内で新しい友人に会っ

たり、ルームメイトを通して新しい人に出会ったりしたことは、学校内の寮だからこそ得られた経験である。

（同じ寮の友だち）

　最後にコロナウイルスの影響について話したい。昨年の後期は、韓国で新型コロナウイルスが大流行し、学校内にほとんど人がいなかったため、学校内での出会いがほとんどなかった。昨年の半年間だけ留学に行った仲間と、

今年の前期に来た仲間を比べると、その交友関係の幅には大きな差がある。積極的に活動をしても、そもそも学校の中にいる人数が多くなかったので、出会いの幅が限られていたように感じる。学校での対面授業が増えるとともに、学校内での出会いも増えてきた。コロナウイルスが学校運営に影響を与える限り、学校内での出会いには副作用が伴うと感じた。

　コロナウイルスの影響で出会いに恵まれなかった一方、出会った人と深くかかわることが出来たのは良かった。中国人のルームメイトや言語交換をしてくれた先輩は冬休みの間にも私を寮から連れ出してくれた。コロナウイルスの影響で人との関係が希薄になりがちだったからこそ、優しくしてくれた人々の暖かさが心にしみた。中国人のルームメイトとは帰国後も週一回のペースで日本語と中国語の勉強会を開いており、韓国人の先輩ともよく連絡を取っている。コロナ時代の留学は以前よりも難しい部分もあったが、留学したこと自体は自身にとって貴重な経験であったといえる。

（韓国人の先輩）

今後も留学の経験や留学中に培った自身の好奇心を活用し、より様々なことに挑戦していきたいと思う。今回の留学は、延世大学の国際交流院の先生方、県立大学の国際交流センターの先生方のお力無しでは出来なかった。再度感謝を申し上げたい。

延世大学
交換留学報告書

静岡県立大学　国際関係学部

韓国の延世大学で過ごした約４ヶ月は、コロナ禍における渡航でありながらも、大変充実した、日々学びのある留学生活を送ることができたと思う。感染対策によるさまざまな制限があったが、そのような状況下でも、自分のできることを精一杯模索し、最善をつくすことができた。この報告書では、私が韓国で経験したことを、学校生活、課外活動、滞在中に訪れた場所の３つに分けて報告させていただきたい。

まず学校生活について述べてみたい。私が交換留学生として派遣された大学は、韓国の「SKY（スカイ）」と呼ばれる３大名門大学のうちの１つである延世大学（Yonsei University）の未来（原州）キャンパスである。ソウルからは少し離れた閑静な場所に位置し、キャンパス周辺は自然豊かな緑に囲まれていて、勉学に励むのに適したところであった。講義は、韓国語で行われるもの、英語で行われるものどちらも履修したが、現地の学生と同じように受講する講義については、予習復習含め、ついていくのに必死だった。また、履修した講義は全てオンラインで行われた。講義の中で印象に残っているのは、韓国語の会話表現を学ぶ「ADVANCED KOREAN CONVERSATION」である。受講生は私と同じような交換留学生や正規留学生で構成されており、国際色豊かな講義であった。それに合わせて教授も学生にその国の文化を質問したり、反

対に韓国の文化やしきたりについても教えてくださった。韓国語能力を身につけられるだけでなく、知的好奇心が刺激され、毎週の講義がとても楽しみだった。一種の国際交流の場でもあったと思う。学期末には、試験とは別に自分が関心を持っている社会問題を取り上げ、それを基にしたスクリプトを作り、発表するという課題があった。私は「韓国の若い男性による女性嫌悪と、それに対する女性運動について」というテーマを選択した。説得性を高めるために参考文献として論文を読んだり、堂々とした態度で発表が行えるように練習をしたりと、とても大変で、しっかり発表できるか不安だった。しかし、当日発表したときには、教授からお褒めの言葉と、高い評価をいただくことができ、思わず笑みが溢れてしまうほど嬉しかったし、達成感があったのを覚えている。

次に課外活動についてだが、小針先生からのご紹介で「第 7 回日韓ジュニアフォーラム」に参加させていただいた。「20,30 世代が考える日韓関係の突破口」をテーマに、韓国人学生 10 人、日本人学生 10 人の計 20 人で討論をした。このフォーラムは全て韓国語で進行されたため、討論の流れを理解するのに遅れがあったり、自分の意見を的確に言語化し、皆に伝えられているだろうか、というような不安があり、自身の韓国語の実力不足を改めて痛感した。しかしながら同時に、同世代の学生たち

が日韓問題に真摯に向き合い、よりよい関係を築き上げていくためにはどうしたら良いのか、活発にアイデアを出し合うことで、新たな視点からの考えを聞くことができ、多くの刺激を受けた。日韓関係が悪化しているこの状況下において、それぞれ意見が異なることはあっても、自分たちなりに深く考えているということは参加者全員に共通していて、希望を持つことができた。このような貴重な場に参加することができ、大変光栄であり、機会をくださった小針先生に感謝したい。また、ここで出会った他の学生たちとの縁を、これからも大切にしていきたいと思う。

最後に、韓国滞在中に訪れた場所について述べる。韓国に渡航する前から、ここだけは訪れたい、と思っていた場所があった。それはソウルにある性平等図書館「ヨギ」である。この施設は、韓国のフェミニズム運動の歴史がつまったような場所だ。女性の人権問題を含むジェンダー問題に関連した書籍や資料が多く置いてあり、自由に観覧可能である。また、2016 年に韓国で起きた「江南駅殺人事件」の追悼ポストイットが保管されている場所でもある。私は以前から # MeToo 運動を始めとする韓国のフェミニズム運動に関心があったため、休日を使って訪ねてみることにした。残念ながら、書籍や資料についてはソウル在住の人に対し

てのみ貸し出しが可能だったため、借りることはできなかったが、職員の方に撮影の許可をいただき、館内の様子だけ撮影した。実際に事件現場に貼られていたポストイットたちに目を通すと、女性ひとりひとりの切実な思いが綴られており、胸が痛んだ。中には男性が書いたと思われるポストイットもいくつかあった。私のような留学生が訪れるのは滅多に無いそうで、職員の方から「どうしてこのような所に来たのか」「普段はどんな勉強をしているのか」など、とにかく質問攻めに逢ったが、最終的には「海外から関心を持って来てくれることが嬉しい」「必要なことがあればなんでも言ってほしい」と親切にしてくださった。おそらく 2,3 時間は居たと思う。館内には書籍の他にもオリジナルファイルやステッカー、マスク、生理用品などが無料配布品として置いてあった。このような場所があることが少し羨ましく思うと共に、韓国のフェミニズム熱を直に感じることができ、行ってよかったと思った。

韓国で過ごした約４ヶ月は本当に一瞬で、夢のようだった。コロナウイルス感染症が流行していなければ経験できたはずの留学生活もあっただろう。しかし、コロナ禍でなければ経験できなかった、平時とは異なる特殊な日々を過ごすことができ、それも自分の成長の糧になったと思う。与えられた環境の中で、自分がどう過ごすのか、何をすべきなのかを考え、行動する力が鍛えられた留学だった。渡航すること自体が厳しいなか、交換留学生として送り出し、受け入れ、サポートしてくださった大学や、家族、友人には、心から感謝の気持を述べたい。このような貴重な経験を今後の人生に活かし、社会や人々に貢献できる大人になりたいと思う。